

幼児の生活

L・W・ベンナー

宇川和子訳

私たちが子どものために組むプログラムには、それと関連したいろいろな問題を考えなければなりません。

まず第一には、子どもは特定の文化の中に生まれ、特定の文化の中に成長していることです。子どもの成長は非常に長い期間かかるものですが、この間に形成されるいろいろなものもまた、文化の組織の中に含まれていきます。子どもは成長するにつれて、自分はどういうものであるか、どんな事が出来るかという自意識をつくりつつ、その文化との交渉を学び、自分の地位をみつつけ出していくのです。

さて、文化は国・地方によって違うものですが、それぞれにいろいろの特長があるということを心に留めておかなければならな

いと思います。私の国であるアメリカでは、年令層というものについてたいへん意識をもっています。

例えば、両親がどこかに招待される場合には子どもは含まれません。社交上では勿論、学校でもそうなのです。子どもは家で留守番をするか、さもないければ他の方法がとられることに何の不思議もありません。ある時、私は両親と六才になる女の子を日曜のおひるに招きました。すると母親は自分の招かれたことを感謝し、次に「キャロル（女兒の名）はよんで下さらなくても結構です。これまでもよばなかったのですから」と言いました。ですから私はキャロルを特にお招きしているのですから、御家族おそろいでおでかけ下さい。日曜のおひるならおいでになれるでしょうか

ら」と伝えました。結局家族三人がそろって参りましたので、私も楽しく愉快な一と時を過すことが出来たようなわけでした。

また、私がお茶の会によべられたとこのことです。その家の二人の子どもがお部屋の中を遊びまわり、そのうちに、だんだんふざけてきました。それで母親は「これはおとなの会ですから、もしお前たちがお行儀よくできるならばここにいってもよいけれども、できなければ外へ行きなさい」と注意しました。子どもは早速静かに座りましたが、これはおとなの会であるということをよく言いきかせてあったそうです。

また、いつも家族中を招いてくれる家庭がありました。パーティーがはじまると、どうしてか子どもは子ども同志、ティーンエージャ同志、おとな同志というようにわかれてしまいます。

これらは普通の日常生活におこるありきたりの実例にすぎませんが、アメリカの文化が年令別にわかれてしまう傾向をよく示しているものだと思います。

心理学者は、「先生はその子どもの生活している文化を理解しないと効果的な教育ができない」と言っておりますが、どのような文化の中にも、子どもの教育のためのいろいろな目的や目標があります。そしてその目標のもとに、子どもたちに学習させます。私の国では、次のようなことが目標として挙げられております。

- (1) 先生や両親は、子どもたちが自分のことは自分で出来るようにするにはどうしたらよいか、ということ習わせる。
- (2) いろいろの生活の中で、権威というものを受け入れるよう学ばせなければならない。

これは第一に、両親を敬うことからはじまります。

- (3) 自分の性の役割、すなわち、女の子は女らしい、男の子は男の子らしい役割を、その立場にたったときおこなっていくよう、子どもたちに、習わせる。

- (4) 今までにできあがっている文化を冒さないということ、すなわち、よき市民として成長するように援助する。

- (5) いろいろな環境の中にあっても、子どもたちが安定感をもっているようにする。

このためには根本的な欲求を満たしてやる必要があります。根本的な欲求とは、(1)人に受け入れられたい。(2)何かを完成したい。(3)賞讃されたい。(4)愛情の欲求、などですが、これらが満たされたときにその子どもは安定感をもった子どもになれるのです。

プログラムに関連した第二の問題は、先生や両親の態度がいかにあるかということです。

なぜならば子どもはおとなの模倣によって成長するからです。

まず第一に言語(話し方)をまねします。また、社会における行動をまねします。小さい子どもを連れた親が、子どもの年を實際よりも小さく言って汽車の切符を買わないで乗せることなどがありますが、これは子どもにも不正直ということを教えるものです。

子どもたちは何でも模倣しますので、先生とか両親にはたいへんに重い責任がかかっていることを知らなければなりません。殊に先生は小さな子どもにとって全く偶像のように考えられていますから、先生の動作の一つ一つに関心をもつて眺めています。

ですから私たちは子どもが示すこのような愛情に値する人であればならないと思うのです。

ある日、子どもたちが帰宅した後、一人の女の子だけがお姉さんの来るのを待って残っていました。私は書きものをしておりました。そこへ子どもが寄ってきて、私のするのを見ておりました。しばらくして、「ペンナー先生は字がお上手ね」と言いました。私は「どうもありがとう」と言ってまた仕事を続けました。そのうちに「ペンナー先生、私大好き」「それはどうもありがとう。私もあなたが好きだから本当によかったわね」と言っていました。書きつづけました。そのうちに私の傍にその子どもが立って「ペンナー先生、キッスしてあげる」と言って手を首のところにやっけてキッスしてくれたので、私もその子どもにキッスしてあげまし

た。この子どもは、何とかかんとか言いながら、自分の感じていることを示したかったのだとした。

これは先生というものを理想化して、自分のすべてと感じている一つの例ですが、私たちは子どもにとって非常に大切な人であるということを考えなければなりません。そしてこれは家庭における両親の役割についても別の方向から言えることです。

先生は学校において教育の場をつくらなければなりません。建物や施設も大事ですが、どんな立派な建物があっても先生がよくなければ子どもたちはよくありません。組まれるプログラムも、先生のよさに比例して違ってきます。

私が住んでいるニューイングランドの近くの町に、とても立派な建物があります。けれども毎朝そこを通るときに感じるのは、立派な建物だということではなくて、なんて情ない学校なんだろう」ということなのです。いつでも窓に絵がかかっている、窓をふさいでしまっている、子どもたちが窓から外を見ることが出来ません。おまけにその絵たるや、誰もが全く同じ絵をかい、それを切りぬいて窓にはるのです。そこには何も子どもたちの創造性を見出すことがありません。いつでも、皆が同じことを同じようにしなければならぬのだという様子があらわれています。でもその先生は、全く情性になってしまっていますので、

プログラムはいっこうに変わらないのです。建物が新しくてもプログラムが新しくされていない、ということは残念に思われます。では、どのようにしたら子どもたちによい経験や機会を与えて学習を助けることができるでしょうか。これが第三に考えなければならぬ問題となります。

それにはまず、よい計画をたてるということです。勿論、私たちは何をするのに計画を立てねばなりません、最初考えたこと以外にも、いろいろのよい機会があるということを知っておくべきでしょう。

私たちが歌を教えるとき「歌」というものは計画の中に入れることはできませんが、そのときに誰かが非常に乱暴して困るということは、計画の中に入れておくわけにはまいりません。しかしそのときに子どもたちがお互にどのように振舞うかということは、新しい歌を覚えることよりも大切です。これからの世の中における人間関係の基礎になるものを習うからです。

このように私たちは、はじめの計画の中になく小さな出来事を取り出していくような融通性をもたなければなりません。

このような考えから、私の幼稚園では外来者のために張りつけたスケジュールの下に「これに沿って保育しますが、もっと融通性をもって、その時々についた事柄に対していろいろいたしま

す」と書いておきます。そうすれば参観に来たかたに、ある特定の時間に特定のことをやっていると思われませんし、先生がたにも場に応じて臨機応変に自由にやっていたからなのです。まだお話ししたいことはいろいろありますが、昨年度アメリカの教育委員会の講演で七つの目的があげられましたので、次に紹介いたします。

- 1 基礎になる学習は、自分で考えるということを通して教える。
- 2 いろいろの技術を発達させ、またその基礎となる科学的な機会を豊富に与えるよう、大いに努力する。
- 3 創造的な精神を見出し、それを刺戟すること。
- 4 積極的な思考力を与える。
- 5 他の国々を理解する機会をひろげるとともに、国内ではよい人間関係を助長する。
- 6 学校または地域社会において、よい市民となるための実行をすること。
- 7 宗教的な意識をもち、個人の精神発達を助長すること。

これらは私の言いたいことを非常によく言っております。